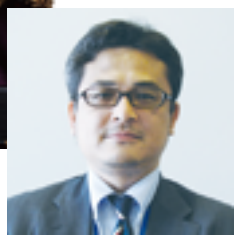
CBRC Newsletter 18
http://www.cbrc.jp/

エッセー P.1
トピックス（CBRCプロジェクト）
研究紹介（亀田）
お知らせ・成果紹介・研究員紹介

戦闘的研究生活の薦め

堀本　勝久　(Katsuhisa HORIMOTO)
生体ネットワークチーム　研究チーム長

昨年4月より、生体ネットワークチームの研究チーム長に着任いたしました。この度研究生活15年目で初めて具体的な研究課題を冠したポジションに就き、責任をひしひしと感じています。また一方、これまで研究テーマを我儘に決めてきましたので些か不自由も感じながらも、きちんと研究することには何の変わりもない訳ですので悠長に構えています。「きちんと研究する」と言いましても、研究者それぞれに様々な考え方があります。歳を取り来し方を振り返りますと、大学院と助手時代にお世話になった先生方の研究姿勢が今日の研究の基調低音になっている事をつくづく感じます。

私は東京理科大学でグロビン族の分子進化研究で学位を取りましたが、グロビン分子は分子生物学創成期から研究された代表的な生体分子であり、生理学、物理学、化学など様々な観点からの研究があり、生命現象の解明に多次元的な考えが必要なことを学びました。また、ヘムの電子状態の研究がご専門の大塚仁也教授の指導で物理学を勉強していましたが、進化研究のために必要な確率過程や統計学の勉強を始め、以降の研究の「武器」として役立ちました。学位取得後、同じく東京理科大学の次田晧教授の助手になり、主にタンパク質配列解析の理論研究をしました。次田先生はタンパク質微量分析法の開発がご専門ですが、同時に日本への配列データベース導入の旗振りを同大学顧問の小谷正雄先生となさっていましたので、そのお手伝いもしました。

研究対象や手法には個人の「好み」がありますが、「きちんと研究する」規範は先達のお二人が常々仰っていたことから学びました。すなわち、「仕事をするのは当たり前、論文にしろ」、「雑用と教育を言い訳に研究をさぼるな」、「私や他人の研究の真似はできて精々80%、新しいアイデアを出せ」、「結果的な間違いを恐れず自説を主張しろ」、など。これらは随分戦闘的な姿勢です。しかし、些か恥じるところもありますが、前職の東京大学医科学研究所特任教授までの11年間、気儘に独りで仕事をする際の指針であり戒めになりました。この姿勢に従えば、お行儀の良さだけが目立つ減点主義の陰気さも、個として如何なものかと感じる古今伝授の盲目さも学生に無く、また、論文が書けない、研究テーマがない、それを取り繕うのに威張る、という想像の埒外にあるような指導者も現れること無く、明朗快活な研究生活が保障されると考えます。これからいよいよ煩い頑固オヤジになって、ただし、老害だけは気をつけながら議論（弁証法のバトル）を続けます。と、このようなことを言うと「アイツは乱暴だ」と言われそうですが、ここで述べたことは研究姿勢であって生活信条ではありません。